都小特活
第103号
東京都小学校
特別活動研究会
平成30年9月発行
発行人
赤羽根　智

特別活動が育む力

会長　赤羽根　智（東久留米市立第二小学校長）

「特別活動でどんな力が育つのですか？」
「学力向上に特別活動は必要ですか？」
こんな質問をされたことがあります。でも大丈夫です。“為すことによって学ぶ”ことを率先垂範してきた私たちには、歴代の諸先輩方から累々と積み重ねられてきた貴重な実践と心強いデータがあるからです。

国立教育政策研究所教育課程研究センターの『平成24・25年度 小学校指導要領実施状況調査』によると、特別活動の目標に関して「よりよい人間関係を築く力の育成に係る児童質問紙調査（「みんなで話し合ってなかよく楽しい学級にしている」）、教師の質問紙調査（「児童は、協力してよりよい学級生活や人間関係を築いている」）の両方において肯定的な回答が約9割。そして、「特別活動に関する児童質問紙調査に肯定的な回答をしている児童が多い学級ほど、各教科のペーパーテスト調査における平均正答率が高い傾向が見られる」としています。このことは、「特別活動で児童同士に親和的・協力的な関係が育ち、集団活動に意欲的に取り組むことで学習意欲が向上する。その結果として、学力の向上につながる。」と言えるデータです。

また、2015年実施のOECD国際学力調査で“協力して問題解決する力”において日本は52の参加国・地域で2位、加盟国の中では1位でした。この結果について「特別活動が育む―日本特有の教育として海外から注目されている」（日本教育新聞）と高く評価されました。これは、新学習指導要領作成ワーキンググループの『特別活動に関する現状・課題』の中で「学校教育が再認識すべきは、“チームで行動する力”、“自らシナリオを描く経験”や“社会や地域に関心を向ける機会”が極めて重要であるということ。そのために特別活動は重要な役割を果たす。」と明記されていることでもうなずけます。

５月10日、関係諸団体の皆様にご臨席いただき、東久留米市立第二小学校において本研究会の定期総会が開催され、本年度の研究がスタートしました。研究主題『自己有用感を高める望ましい集団活動』のまとめの年度として、有効な手だてをさらに深め、分かりやすく発信していきたいと思います。来る平成31年2月22日（金）に東久留米市立第二小学校において研究発表会を行います。ぜひご参会いただき、ご意見、ご感想などを賜りますようお願い申し上げます。

本年度の研究の基調

研究部長　佐野　匡（練馬区立大泉東小学校長）

1　研究主題

「自己有用感を高める望ましい集団活動」
～学習指導要領の確実な実施のために～

2　主題設定の背景及び理由

本研究主題で３年目の研究となる。これまで２年間の研究で以下のことが明らかになっている。

１年目

○人間関係形成力を高める指導の手だてとして有効であったこと
○個の成長、集団作りの指導の手だてとして有効であったこと
○活動の可視化が有効であったこと

２年目

○手だての有効性を検証する方法を検討し、根拠をもとに手だての有効性を明らかにできたこと
○検証方法を考えることで、児童の活動のとらえ方を発信できたこと
○カードや資料の活用により、校内の教員へ特別活動について発信することができたこと

また、２年目においては、新しい学習指導要領の理解を深めるために、プロジェクトチームを立ち上げ、学級活動（２）、（３）についての指導案や実践を発信することができた。

３年目となる今年度は本研究主題でのまとめの年と位置付け、有効な手だてをさらに深めていくとともに、その有効性がだれにでもわかる検証を行っていく。特別活動の有効性を多くの教員が認識することが、本年度から新しい学習指導要領のもと行われる特別活動を、各校で確実に実施することにつながっていくと考える。

研究の進め方や視点は昨年度のものを継続しながら、視点の表し方やまとめ方を統一するなどして、各活動部の成果がよりわかりやすく発信できるように研究を進めていく。

3　研究の進め方

授業実践を中心に据えた実践研究
実践を裏付ける理論構成（深める）
汎用性・再現性のある提案（広める）

4　共通の研究の視点

可視化　（構造化　操作化）
振り返り（自己評価と相互評価）
手だての有効性（検証）
学校全体での組織的取り組み（位置づけ方）

学級活動部

部長　藤田　寛樹（文京区立湯島小学校）

◎活動部主題◎

「もち味を生かし、
互いに認め合い高め合う学級活動」

1　主題設定の理由

主題を「もち味を生かし、互いに認め合い高め合う学級活動」と設定し、２年間の研究を進めてきた。自己有用感を高めることを意図した可視化に取り組んだことで、児童一人一人の活躍の場が広がったり、「人の役に立った」と児童に実感させたりすることができたなどの成果がみられた。学級活動部で積み上げてきた手だてを重ねることで、児童が自分たちで学級会を進められるようになり、自己有用感の向上につながっている。また、自己有用感の評価については、アンケートや振り返りカード、作文などを分析し、学級全体や児童一人一人の実態把握を深めることができた。しかし、分析結果やもち味を児童に返し、さらなる成長につなげていく工夫が必要である。

今年度は、昨年度の研究を通して明らかになった課題を含め、自己有用感を高めるための可視化や互いに認め合い、高め合うための振り返りに視点を当てて研究を進めるとともに、３年間の研究内容を整理する。

2　研究の視点

①　自己有用感を高めるための可視化の工夫

②　互いに認め合い高め合うための活動の充実

③　手だての有効性の検証

④　学校全体での組織的取り組み

3　検証授業の予定

○　9月21日（金）港区立白金小学校
　　学級活動（1）
　　矢部　織生　教諭（6年）

○10月26日（金）練馬区立北町小学校
　　学級活動（1）
　　神山　卓也　教諭（5年）

○11月30日（金）江戸川区立本一色小学校
　　学級活動（3）
　　木﨑　清子　主任教諭（3年）

児童会活動部

部長　大藏　久美（小平市立小平第六小学校）

◎活動部主題◎

「互いを認め合う
異年齢交流を深める児童会活動」

1　主題設定の理由

全体研究主題「自己有用感を高める望ましい集団活動」を受け、児童会活動部では「児童会活動における自己有用感」とは何かを考えた。

自己有用感を「自分は必要とされている」「自分は役に立っている」と思える感情と定義し、それは他者に認められてはじめて得られるものであると考えた。児童会活動では、学年や学級を超えた異年齢集団での様々な活動が行われる。その中で児童の自己有用感を高めるためには、下級生からの「あこがれ」の気持ちや上級生の「思いやり」の気持ちが必要である。下級生の「楽しかった!」「かっこいいなあ!」という「あこがれ」の気持ちが上級生に伝わることで、上級生は「アイデアを出してよかった!」「次もいろいろ考えてみよう!」という気持ちになり、自己有用感が高まる。そのためには、「あこがれ」や「思いやり」の気持ちを可視化して伝えることや、場の設定を工夫することが必要である。「あこがれ」と「思いやり」のスパイラルを意識した異年齢交流を積み重ねることで、自己有用感が育ち、高まり、よりよい人間関係が築けると考えた。

そこで、研究主題を「互いを認め合う異年齢交流を深める児童会活動」と設定した。

今年度も以下のことに留意して研究を進めることにした。

○「児童の発意・発想を生かした活動」の場を保障する。

○「計画」から「振り返り」までの活動を一連の活動としてとらえる。

○児童会活動の特質である「異年齢の人間関係」に焦点を当てる。

2　研究の視点

①　自己有用感につながる「あこがれ」と「思いやり」の可視化の工夫。

②　『メッセージボード』の振り返りの視点を見直し、明確にする。（相互評価させる）

③　『メッセージボード』を継続し、手だての有効性をさぐる。（深める）

④　学校全体で異年齢交流を組織的に取り組み、活動を広める。（汎用性のある活動）

3　検証授業の予定

○11月　6日（火）葛飾区立南奥戸小学校（給食委員会）
　　丹治　良太　教諭　　青木　大輔　主幹教諭

○12月　3日（月）東久留米市立第二小学校（集会委員会）
　　鬼木　雅人　主任教諭　　藤沼　明子　主任教諭
　　保坂　妙子　主任教諭

クラブ活動部

部長　髙橋　信行（足立区立千寿第八小学校）

◎活動部主題◎

「個性を発揮し、互いに認め合うクラブ活動」

1　主題設定の理由

本研究部では、クラブの目標における「個性」について、集団の中でよりよく発揮され、他者と協調できる個であると考える。児童が、望ましい集団活動を通して、互いの個性に気付き、その多様なよさを集団の中で認め合い発揮することで、自己有用感が高まると考える。

２年間の研究で、振り返りの時間を中心に多様な方法で、クラブの仲間のよさに気付くことができるよう手だてを講じてきた。互いのよさに気付くことで、児童の人間関係に深まりが見られるようになり、相乗的に児童の自発的活動も多く見られるようになった。また、個々の記録物を分析することで、児童の変容を捉え、個々に応じた指導をしたり、集団全体の成長を捉え指導の充実を図ったりすることにもつながった。児童の個性を多面的に捉え指導に生かしていくことで、児童同士が人間関係をさらに深め、よりよいクラブ活動を展開させていくことをねらい、昨年度に引き続き本部会の研究主題を「個性を発揮し、互いに認め合うクラブ活動」と設定した。

まとめの年となる今年度は、児童の変容を捉える手だてをさらに深化させ、クラブでの成長を的確に捉えるとともに、「同好の士が集まる集団活動」というクラブの基礎的な特性に立ち返り、児童が興味関心をどのように追求していくかについても手だてを考えていく。

2　研究の視点

①　望ましい集団活動をよりよく展開する可視化の工夫

②　自他の個性に気付き、認め合う振り返りの工夫

③　手だての有効性の検証

④　学校全体での組織的な取り組み

3　検証授業の予定

○10月15日（月）葛飾区立本田小学校
（劇クラブ）　山口　哲郎　教諭

○11月26日（月）江戸川区立第四葛飾小学校
（生き物研究クラブ）　中本　健太郎　主任教諭

学校行事部

部長　原田　恵子（中央区立有馬小学校）

◎活動部主題◎

「自分の役割やよさに気付き、互いに認め合い、活かし合う学校行事」

1　主題設定の理由

自己有用感を高めるためには、学級や学年集団の中で活かすことができる自分のよさや役割を確認できていることが大切である。自分のよさを知るためには、児童一人一人の力を発揮できる場があること、発揮した力を認め合える場があることが必要である。そして、そのよさをみんなに認めてもらえているという安心感があってこそ、自分の力を発揮できる。自己有用感を高める望ましい集団活動になるために、一人一人のよさを互いに理解し合い、その力を活かし合っていかなければならない。学校行事では、自分や友達のがんばりやもっている力を活かし合う場を設定しやすい。より効果的に自己有用感を高めることができる手だてを模索し、実践していくことをねらい、このテーマを設定している。

今年度は、本研究主題での研究３年目である。昨年度まで積み上げてきた手だてを重ねながら、各行事の実践を研究していくとともに、学校行事における自己有用感を高める場や具体的な手だてを検証していく。また、本研究会全体的な評価の在り方についても研究していく。

2　研究の視点

①　自己有用感を高めるための可視化の工夫と活用

②　自己有用感を感じられる振り返りの場や観点の工夫

③　手だての有効性の検証

④　学校全体での組織的な取り組み

3　検証授業の予定

○　9月27日（木）江東区立有明西学園
運動会（１年・事後指導）
兼古　勇祐　主任教諭

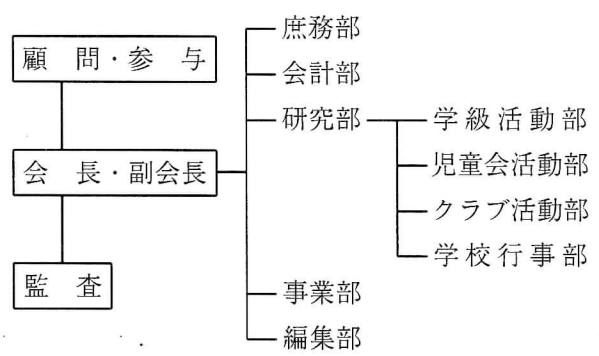
○11月　6日（火）大田区立嶺町小学校
子どもまつり（２年・事後指導）
四本　真美　主任教諭

平成30年度　役員・部員名簿

◎校長 ○副校長 ◇主幹教諭 ◆指導教諭 □主任教諭

役職名	氏名	地区・校名	役職名	氏名	地区・校名
会長	赤羽根　智	◎東久留米・第二	〃　〃	平松隆行	○東村山・回田
副会長	木田明男	◎小平・小平第十二	〃　〃	佐藤美徳	○多摩・貝取
〃	小島みつる	◎北・西浮間	〃　部員	佐藤真美	□小平・小平第十二
〃	新井正一	◎新宿・落合第三	事業部　部長	岡野範嗣	◎大田・東六郷
庶務部　部長	伊藤幸一	◎東久留米・南町	〃　副部長	田村亜紀子	○東大和・第六
〃　副部長	中村和弘	◎江東・毛利	〃　〃	佐藤千晴	○国分寺・第二
〃　〃	今田喜紀	◎板橋・志村第三	〃　部員	田所貴美子	◇中野・南台
〃　部員	吉田和子	□江東・毛利	〃　〃	齋藤光代	◇足立・東綾瀬
〃　〃	海野あい	□東久留米・第二	〃　〃	高野慶文	三鷹・第七
〃　〃	鬼木雅人	□東久留米・第二	〃　〃	梶井　綾	□新宿・早稲田
〃　〃	保坂妙子	□東久留米・第二	〃　〃	佐藤麻美	豊島・高松
会計部　部長	宮野いずみ	◎江東・第二砂町	〃　〃	兼古勇介	□江東・有明西学園
〃　副部長	小山晴美	○練馬・石神井台	編集部　部長	石田孝士	◎世田谷・塚戸
会計(学級活動)	木﨑清子	□江戸川・本色	〃　副部長	篠　達司	◎足立・足立
会計(児童会)	畑　理恵	□葛飾・南奥戸	〃　〃	大野正人	○練馬・大泉北
会計(クラブ)	山路怜子	□品川・大井第一	〃　部員	藤井美貴子	□世田谷・中町
会計(学校行事)	平山かおり	□目黒・東山	〃　〃	酒井博子	東久留米・第六
研究部　部長	佐野　匡	◎練馬・大泉東	〃　〃	仕道祐紀	世田谷・塚戸
〃　副部長	氣田眞由実	◎板橋・成増	学級活動部長	藤田寛樹	◇文京・湯島
〃　〃	篠遠信行	◎文京・根津	児童会活動部長	大藏久美	◆小平・小平第六
〃　〃	福山広信	◎中野・北原	クラブ活動部長	髙橋信行	□足立・千寿第八
〃　〃	橋本弥記	◎国分寺・第八	学校行事部長	原田恵子	◇中央・有馬
〃　〃	吉田有子	○清瀬・清瀬第三	会計監査	梶　千枝子	◎品川・旗台
〃　〃	神谷なおみ	○江戸川・二之江	〃	澤井康郎	◎東久留米・第七

［組織図］



編集後記

会報103号をお届けします。
校務ご多用のところ、ご協力いただきありがとうございました。

（石田、篠、大野、藤井、酒井、仕道）